

ベリーショート賞



白い庭

此礼木富嘉

「雪は音を吸うのだ」

清子の祖父はそう孫娘に常々語っていた。東北の豪農の息子として生まれ落ちた祖父は、当時としては高等な教育を受け、大学まで進学した。卒業後は就職らしい就職もせず、短歌と俳句、詩を書いて生計を立てていた。清子は幼少の頃から祖父の詩を絵本代わりに読み聞かせられて育った。朗々と詩を読む祖父の声は穏やかな音波で運ばれ、清子を暖かく包み込んでいた。祖父と祖母の出会いは見合いで、長い間、祖父の近くでその筆を支え、古いしきたりの厳しい家の嫁として力強く生きて聞いた。そんな祖母も、昨年の冬に亡くなった。八十近くになって、体も自然と弱くなっていった折、ふとした風邪から肺を病み入院し、そのままついに病院を出ることがなかった。祖父は祖母の最期を看取らなかつたという。自分の家でいつもの通り過ごしたという。清子は「なんて薄情なのだろう」と思い、祖父から心が離れていった。祖母は「ごく短い闘病生活で、苦しみが長引かなかつただけよかった、などと葬式で親戚達に語られていた。葬式の席での祖父は、かつて清子に見せていたキツと鋭い眼光も、ピンと伸び大きかつた背中もはや見る影なく、ただ真一

文字に結んだ口元だけが気丈で、体はひと回りもふた回りも小さくなってしまったような、すっかり米寿を迎えた老人の姿になつていった。清子はそんな祖父に、どこか若い自分と相容れない印象を抱き、近づくことすら躊躇われた。肩にゆとりがありすこし大きすぎる、まるで着せられているような喪服姿の祖父と、学校制服に身を包んだ自分が並ぶのが、どこか不気味なようだったし、なにより祖父の体から漂う負の臭いがたまらなく不快だった。

次の年の春先から、祖父は急にふさぎ込むようになった。年をとつても書き続けられていた詩も、雑誌の記事も書かなくなり、一日中縁側に座つて過ごすようになったという。祖母の死をうけて雇つた女中が清子の父に連絡を入れたのは初夏のころ、祖父が一日中縁側から動かないのを見た女中が祖父を医師に連れて行つた後のことだった。もとより頑固な祖父が素直に医師に会いに行つたことも異常ではあつたが、やはり結果は悪い方向を指し示していた。祖父はその頃になるとどこか現実離れした言動や行動を繰り返すようになり、女中を解雇したり再雇用したりすることもあつた。部屋は荒れていき、手入れのさ

れない庭は昔日の大地主の栄華のかけらもすつかり失っていた。女中の提言によって病院に入り生活するようになり数ヶ月、秋の深まった頃に清子たち一家は祖父の見舞いに行った。実家から数駅離れた、少し開けた街並みの中、大きな中庭がある病院に祖父はいた。芝生に立つ木の下のベンチに腰掛けてぼんやりと空を眺める祖父は祖母の葬式からさらに老け込み、まるで別人になったようだった。清子は祖父を遠巻きに見ていたが、父と祖父の会話にどこか焦りのような感覚を抱きながら耳を傾けた。祖父は入院してから詩を再度書き始めたが、その内容はかつての詩人としての洗練されたものではなく、どこか素人じみたつたないものになっていた。

「雪は降るかね」

祖父のそんな言葉だけが、清子の中の祖父の姿をつなぎ止めていた。

それから少しして冬も盛りになった年末近く、いよいよ祖父は施設での生活を余儀なくされたと、父のもとに便りが入った。かつての実家は売りに出されることになり、祖父の私物の整理を手伝って欲しいとの女中からのものだった。数週間の父の帰省の後、父が宅配便で自宅に送ったのは段ボール箱数個の祖父の私物だった。もうそれは遺品だと、清子は思った。父と共に開封を手伝っていた時、清子は本が収まっていた段ボール箱の中に比較的新しい日記帳を見つけた。清子ははっとしてその日記帳を抱え、父に見つからないようにそっと自室に持ち帰った。

夜になり机に向かつて日記帳を開くと、そこには祖母の死の直前までが書かれていた。その中には祖母が入院することになった衝撃や、入院先に行く苦悩が書かれていた。その様子はどこか祖父を避けていた自分と重なり、清子は震える手を握りしめながら読み進めた。

「彼女のことを思うと胸が早鐘のようになるのだ。庭の白い雪を眺めると不思議といやな拍動は治まり、どこか遠くを眺めていられる」

清子はカレンダーを見た。明日は祖母の命日ではなかったか。祖父のその日の記事には、病院からの電話があったこと、その日も夜通し、次の日の朝まで廊下から庭の雪を眺めていたことが記述されていた。祖父はこの季節の暖房もついていない廊下で、キツとした顔で庭の雪を眺めていたのだろうか。清子はぶるっと身震いをした。窓の外では寒々しい木の枝が風に揺れていたが、雪の降る様子はなかった。

清子は次の日の朝早くに体調不良を両親に訴えた。両親、こゝと母親は娘を気づかい仕事を休もうとしたが、清子は申し訳ない、と断った。両親が出勤した後、清子は人生で初めて学校を仮病を理由に休んだ。清子は長い間貯めていた小遣いやお年玉を部屋中からかき集めた。リュックサックの中に財布と祖父の日記を入れ、考えうる限りの防寒をして家を出た。自転車をこいでいる時はひどく暑かった。清子の財布は頼りなく、駅で普通列車の乗車券を購入し、人気の少ない車内に腰掛けた。

途中、何度か乗り換えがあった。清子は、北に向かうにつれて頬を刺す空気が張りつめるのを痛く感じた。列車の中で聞こえる会話が徐々になまりのきついものになり、わからなくなる。と途端に不安に駆られたが、リュックサックを抱きしめてじっと耐えた。この体の震えは寒さからではないと、清子は思った。

清子が祖父の家の最寄り駅に着いたのは夕方近くになったころだった。駅の前はかろうじて除雪されていたものの、あたりは風景はうすらぼんやりとした白色に染まっていた。去年の葬式もこんな感じだったな、と清子は一年ぶりの祖父宅に向けて記憶をたぐり寄せた。途中まではバスを使ったが、祖父宅の最寄りのバス停を降りると、もうそこは腰まで雪の積もった氷の世界だった。除雪のされていない道をかき分けながら歩くと、脚から末端にかけて感覚がなくなっていくような心地がした。スキーウェアに防寒ブーツであっても、清子はガチガチと音を立てる歯を止められずにいた。

売りに出された祖父宅は雪に埋もれていた。庭の松も置き石もなにもかもに雪がまとわりつき、夕日のオレンジの光線を浴びながらゆっくりと時が止まっていくような、そんな気色がした。清子はすっかり息が上がっていた。雪の冷たさに震える体と裏腹に全身にじっとりと汗をかいている。白く曇って視界をさえぎる眼鏡を忌々しそうに何度も手袋でぬぐい、一息おいて清子は目の前の白い山に挑んだ。固く閉ざされた門をよじのぼり強引に突破した時、門扉がガタン、と大きな音を立て、清子

はひやりとした。しかしその音も反響することなく止み、あたりはまたシンと静まりかえった。

「雪は音を吸うのだ」

幼少の頃から聞いた祖父の声自分が自分を応援しているようだった。清子はグツと奥歯を噛みしめて玄関へとにじり寄った。よく見ると門扉から玄関までの道は少しだけ積雪が低く、一度か二度、誰かが除雪しようだった。買手のために不動産屋がやったのだろうかと思うと清子はいらだちが押さえきれず、うめくように声を荒げ、息をした。

玄関までたどり着いた時、清子ははたして自分がここになにをしに来たのだろうかと思い返した。何度も何度も思い返した。身体中の震えだけが清子を急かしたが、答えは出てこなかった。玄関の脇に除雪用の蛍光色のスコップがある。次に目に留まったのは縁側だった。

縁側！ 清子はスコップを手に取り縁側までの道をかき分け進んだ。そしてすこし足場を確保すると、雪の及んでいない縁側に腰掛けた。背後の大きなガラス戸は今今は雨戸に覆われていて覗き見ることが出来ない。しかし、清子はこここそが祖父の見た光景なのだ信じた。ひとつ大きく息を吐くと、白い呼吸が眼前に広がり、薄れて消えた。その瞬間から清子は自分の心臓の拍動しか聞こえなくなった。トクン、トクンという速い連続音を背にした清子は、オレンジから灰に転じようと、その表情を複雑に変えている空を見上げた。清子の視界は曇らなかつ

た。なにもかも音が消え失せた中、次第に自分の拍動さえも、どこか他人事のような、別の世界の現象のような気がしてきた。清子は瞬きをしなかった。じっとして、ついに自分の心臓からも自分が離れた時、清子は強烈に祖父を感じた。祖父と並んで雪に埋もれた庭を見つめている心地がした。

祖父は雪に宿っているのではないか。冬の雪に自らを移し、抜け殻となったのが今、施設にしまい込まれているのではないか。そう思うと清子はとても安心した気持ちになり、ようやく目を一度だけ、ぎゅっと閉じた。じんわりとした暗闇の中、音は何一つなく、ただ時間だけがそこに静止して存在した。

「雪は音を吸うのだ」

祖父の声が頭の中でかすかに響いた。今、目を開けば、きつとなにもかも吸い取ってじっとたたずむ白い庭があるのだと、清子は信じて疑わなかった。

《 了 》